

第1回松本城・城下町写真エッセーコンテスト

佳作 「松本人の誇り」 飯島 隆一



松本人の誇り

飯島 隆一

こたつでお茶を飲んでいた父が「広報・まつもと」の表紙写真を指差しながら「いつ見ても松本城はカッコいいなあ」と笑顔で話しかけてくる。

「この豪華な破風なんか特にだな。おれはさあ、いつもこの城を見ながら、仕事に出掛けたもんだよ」父は六十年以上も大工をやってきて、棟梁の目で城を見ているんだろう。

そばにいた母が

「子供の頃はねえ、城の中を下駄でカチャカチャ走りまわったもんだよ。だれでも平気ではいれてさあ。今じゃ、子供達が床みかきをやってるが、えらくささくれだどでてると思うて、棘でもささなきやいひがね」と笑うかう。

「それでね、田町小学校の時だがね、松本中学の運動会に呼ばれてさね、お城の庭でやったんだよ。えらい人だったねえ。その時、始めて洋服を着せてもらって、嬉しくて嬉しくてね。ブルマをはいて「信濃の国」を踊った。今でもやれって言われりや踊れるよ」

足が痛いの立っことはままならないのであるが、ほほ笑みながら歌いだし、手を振りあげ、踊りのしぐさをしてみせる。そしてなにかを急に思い出したのか、丸くなった背を少しばかり伸ばし

「それでねえ、お城がいくらかで売りに出された事があったさね、小林有也って松本中学の校長先生が保存運動をやったさね、良かったってもんだよ、ほんとに」

と、やや胸を張ったように話す。

お城は松本人の誇りとしてだれの胸にも、いつまでも心に刻まれている。